

2012年3月30日

NO. 159  
発行責任者  
河野 禮三

# 東大阪地域労組「働く仲間の会」 仲間の会ニュース

東大阪地域労組「働く仲間の会」  
〒578-0985  
東大阪市中野南1-36  
かわち勤労会館内  
TEL 072-961-6653  
FAX 072-961-6432

## 中小・零細企業の街、東大阪で未組織労働者の灯台に 再建十周年記念集会開催



3月25日(日)かわち勤労会館で、東大阪地域労組「働く仲間の会」再建10周年記念レセプションが開催されました。大阪各地の地域労組をはじめ、市内の労働組合、民主団体の方々、

組合員21名が参加、総勢54名の参加で盛大に開催されました。河野委員長は「一年間40件の労働相談の団体交渉や、難しいケースは大阪法律事務所の方々の協力も

得て解決している。企業に脅かされて泣き寝入りし、一人たりという人たちが、一人では支えてくれない、仲間がいる。労働組合に入らなくては



かおると呼ばれて、環境保全公社職員労働組合の争議支援の訴え、貝印の村賀さんが「会社の上司のパワハラで心の病になって休職したが、復帰にあたり、会社は病気の原因になったパワハラも認めないし、職場環境の見直しもない、がんばって職場復帰をしたい」と支

援を訴えました。レセプションの最後に、この十年間、委員長として、土日も含め労働相談を受け、奮闘してきた河野さんに、感謝状と記念品が贈呈されました。

### 地域労組おおさかー 泊交流会に参加して

3月3日、4日と池田の不死王閣で「地域労組おおさかー」の泊交流会が開催され、働く仲間の会から、河野さん、\*\*\*さん、\*\*\*さん、\*\*\*さんの4名が参加しました。初めて参加した\*\*\*さんは、「ワールドカフェ形式のディスカッションで自分の意見も言え、先輩の意見も聞けたので、とても有意義な学習会になりました。ワールドカフェでは、労働組合で何ができるのか。何がしたいのかをテーマに四人一グループで討論し、途中経過を模造紙に書いていきます。四人グループは一人を残して解体し、別のグループに入り、最後は元のグループで討論する形式です。」また、\*\*\*さんは、「風呂に入る時間もなかったが、いろいろな人と交流できてよかった。宴会の時に地域労組ごとに集まらず、バラバラになったらもっと交流できたと思う」など語ってくれました。\*\*\*さんは、「働くことと、休日を楽しむこと、共にがんばりましょう。そんな思いを新たにしたい集会でした」と感想をよせてくれました。

### 三・一一原発ゼロの集会に8000人

3月11日、扇町公園で原発ゼロの集会が開催され、「働く仲間の会」から、河野、西口、楠本、\*\*、\*\*、\*\*、\*\*が参加しました。

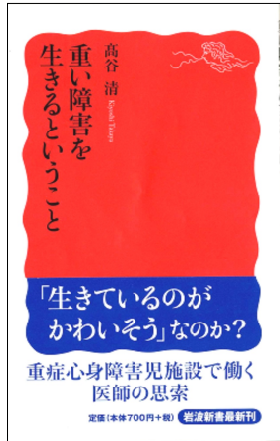
集会では、福島農家の人が、「自分の田んぼと畑は2メートルの海水の下にあり農業を再開するメドがたっていない。仮に農業が再開されて



も、福島産の農産物は売れないために生活のメドがたたない。国は、東電からの賠償金にさえ税の徴収をする。また、国や東電は生活の復興のために何もしてくれない。復興庁が東京にある限り、東北の復興はない。みなさんをお願いするのは、正しく放射能を恐れてほしいことです」と発言しました。雨がぱらつき冷たい風が吹く悪条件の中、中崎町までパレードを行いました。

### 書評

「重い障害を生きるということ」  
高谷 清



著者は、重症心身障害児学園で働く医師であり、園長である。著者が働く『びわこ学

園』では、すさまじい重症の子ども達が入ってくる。その子ども達に向きあって「ほんとうに、生きているのが幸せなのだろうか」という問いに対する答えとして、この本を書いたと著者は述べている。

かつお君というのは、水頭無脳症(大脳、中脳、小脳などが形成されていず、その部分が脳脊髄液でおきかわっている)。この、かつお君に「健康増進」の計画が立てられ、「皮膚の鍛錬」で外気浴、日光浴、乾布まさつ。「一年間は乾布まさつのみを実行していく。

ガーゼ、タオル、軍手、そして冷水まさつと順次慣れさせていく。そのなかで、かつお君が笑ったという「外に出

て、日差しの中に入ると、太陽のほうに向くひまわりみたいに頭を上へ上へもちあげて、明るい空をじっと見つめているようだった。こんなときは顔がしだいにゆるんで、口を大きくあけ『アー』と笑い出してくることが多かった。

かつお君の笑いは、「いわゆる笑いではない。しかしその顔は『楽になったよ、気持ちがいいよ、ありがとう』と言っていた。脳の形成がなくても、脳が破壊されていても、本人が『気持ちよく感じる』状態は可能なのだ。看護師と介護者のとりくみは、彼のからだに「快」を生み出した。

E君は、脳に「しわ」がない「滑脳症」であり、脳波にはてんかん性の波があると言う。小学入学当初と担任が代わった四年生の時に直径1センチの円形脱毛症ができたそうである。いずれも8月頃に消えたと言う。

Eくんを学校に連れてきたお母さんが、「今日は機嫌が悪いか調子がよいとか言われるが、なかなか表情だけではわからない、見分けにくい」「『快』の時はどういふ表情なのか『不快』なときはどうなのかを問われてもわからな

いと、本人の快さや不快さが伝わってくる」という。

著者は最後に、「「生きているのがかわいそうだ・生きているほうがよいのであるのか」ではなく「生きていることが快適である・生きている喜びがある」という状態が可能であり、そのことを実現していくことが、直接かわっている人の役割であり、そのようなことがなされるような社会的なとりくみをおこなうことが社会の役割であり、人間社会の在りようではないかと思う」と述べる。

ここまで読んで、私には深い後悔がおそってきた。8年前、親父が老人病院に入院していた。和歌山に帰った時や、釣りの帰りに病院に親父を見舞い、その日の釣果や釣り場所を耳の遠い父親のために筆談で話したことはあるが、快い外気に触れさせてやろう。公園の緑や小鳥のさえずり、街の音や、太陽の日差しを浴びさせてやろう、などとは露ほども考えなかった。介護とは、「介護される人と介護する人が共に今を快適に、心穏やかに同じ空間と時間を楽しむこと」ではないのか、と言う思いがこみ上げてきたのである。